# 西尾実と道元（X）

杉　哲

## 一　イプセンの受容

西尾実は飯田時代（明治四三年四月～明治四五年三月）より思惟様式に関心を集注していた(1)。就中、「沈潜」という儒教的伝統の発想に親しみを寄せていた(2)。事情は、「道元禅師」（『信濃教育』大正三年三・四月号）でも、同じであった。イプセンの「第三帝国」受容における「静思」の緊要性の提言が、そうである。西尾実は「第三帝国」構想の是非には言及しない。西尾実が問題とするのは、受容の仕方にあった。いいかえると、対象認識の方法にあった。即ち、思惟様式のありようが問題であった(3)。西尾実は、このように、イプセン提唱の「第三帝国」論に多大な関心を示していた。関心の持ち方には、ある傾斜があったけれども。

では、「道元禅師」執筆当時、西尾実はイプセンそのものには関心がなかったのかというと、そうではない。イプセンは、まさしく当代思潮の一つであった。「第三帝国」論以外のイプセン受容は、どのようであったろうか。次に、この点についてみていこう。

日本ではこの頃（明治四二年―引用者注）、イプセンは文学者として、また同時に思想家としてその作品がもてはやされていた。イプセンの翻訳については、先に記したように高安月郊の『イプセン作社會劇』が明治三四年に出版されたが、この他雑誌には、千葉掬香訳で『建築師』（『歌舞伎』明治三七年一月～四十年四月、「ヘッダ・ガブラア」（『心の花』明治四一年一月～四一年五月）、「蘇生の日」（『明星』明治四十年三月～九月）がみられ、これらはそれぞれの年の内に単行本として上梓されている。

一方高山樗牛の「文明批評家としての文学者」（『太陽』明治三四年十二月）、『早稲田文学』のヘンリック・イプセン」特集号（明治三九年七月）、長谷川天渓「幻滅時代の芸術」（『太陽』明治三九年十月）また上田敏の「イプセン新論」（『新小説』明治四十年三月）等、独自の評論や欧米の評論家の論文の紹介も活発であり、「イプセン会」の活動もあった。その他雑誌新聞には次々と評論が紹介され、また逍遥のこの講演の行われた年（「逍遥のこの講演」とは坪内逍遥が早稲田大学出版部主催の早稲田講習会で行った「イプセンの社会劇」のことであり、期日は明治四二年七月十五日より二四日の間であった―引用者注）、鴎外は自由劇場のため『国民新聞』に『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』の翻訳を連載し始めていた。

いずれにしろ、翻訳、評論、研究会と様々な分野で、イプセンの作品は新しい思想の盛られた、新しい文学として強い関心の的であったことがわかる(4)。

西尾実に「『人民の敵』を読みて」と題する論考がある。「『人民の敵』を読みて」は、『細道』（明治四四年十一月印刷発行　発行兼印刷人・森下二郎　印刷所・星野活版所）に収載されている。

「『人民の敵』を読みて」の末尾に、「一千九百十一年九月十日夜」とある。これに従えば、稿了日は一九一一年、つまり明治四四年九月十日の夜ということになろうか。

「人民の敵」の原作品の題名は、何であったか。原作名は、「En folkefiende」である。原作の刊行年は、一八八二（明治十五）年であった。作者は、イプセンである。

「人民の敵」のテクストは、西尾実の場合、何だったのだろうか。原作はノルウェー語である。とすると、テクストは翻訳であった可能性が高い。原作の翻訳状況は、どのようになっているだろうか。「En folkefiende」の翻訳史をみてみよう。

榊原貴教「イプセン翻訳作品目録」（『翻訳と歴史』第三五号　ナダ出版センター　二〇〇七年十一月三十日発行）によると、日本における「En folkefiende」の翻訳状況は、次のようである。最初に、「イプセン翻訳作品目録」の「序文」を掲げる。

本目録は明治から現代に至るイプセンの翻訳作品を作品別に一覧したものである。但し、詩・書簡の翻訳を除いた。配列は原作発表順とする。目録配列の表題は『イプセン戯曲全集』の原千代海訳名を採用する。また、同一作品の翻訳も各項中、刊行年代順とした。単行書には、＊印を付して、新聞及び雑誌掲載の翻訳と区別した。

次に、「イプセン翻訳作品目録」より、西尾実の「『人民の

敵』を読みて」が制作された明治四四年九月現在までの分を、以下に掲げる⑮。

■人民の敵 En folkefiende　一八八二

明治二六年三月

社会の敵（脚本）高安月郊訳　同志社文学（～六月）

明治三四年六月

社会之敵 森皚鋒訳　時事新報（十五日～七月五日）

明治三四年九月

＊社会之敵 森皚鋒訳　森晋太郎

（訳文は初め、本年五月より六月に亘り、二十日間に分載して、これを時事新報に公にせり。原書の四、五両齣に係るものは、日刊の新聞紙上に連載するに於いて、局面の変化に乏しき嫌あれば、甚だしく之が省略を試みたるも、今集綴して一部の書となすに当たり、稿を更めて、全く之を原書の状に復せしめたり。）（序）

明治三四年十月

＊社会之敵（『イプセン作社会劇』）高安月郊訳　東京専門学校出版部

明治四一年十月

社会の敵（梗概）SM生訳　新潮

明治四四年八月

＊人民の敵 太田三次郎訳　政教社

「En folkefiende」の邦題には、明治四四年九月現在、「社会の敵」、「社会之敵」、「人民の敵」があった。「人民の敵」という邦題は、太田三次郎訳以前には見当たらない。太田三次郎訳『人民の敵』は、奥付に従うと、明治四四年八月十八日に、政教社より、単行本にて刊行されている。他方、西尾実「『人民の敵』を読みて」の稿了日は、「一九一一年（明治四四）年九月十日夜」であった。邦題訳史の状況、太田三次郎訳本の刊行時期、「『人民の敵』を読みて」の稿了日、これらを照合すると、次のようにいえるのではないか。「『人民の敵』を読みて」という論考において、西尾実が手にしたテクストは太田三次郎訳本であった可能性が高いと。

テクストが太田三次郎訳本であったと仮定すると、どうなるであろうか。西尾実は、刊行後ほどなく本書を手に入れたことになる。また、本書入手後、日を置かずに読了し、これまた短日時の間に、読後の所懐を「『人民の敵』を読みて」という文章にまとめたことになる。太田三次郎訳本の刊行から「『人民の敵』を読みて」稿了まで、一ヶ月もかかっていない計算となる。刊行から稿了までの時間の短さは、何を物語っているだろうか。本書に寄せる西尾実の思いの強さが、浮かび上がってこよう。『人民の敵』に、将又、イプセンに対する西尾実の関心の高さが反映しているともいえようか。

太田三次郎訳『人民の敵』とは、どんな本であったろうか。

太田三次郎は、本書の「序」において、翻訳の動機や目的、「人民の敵」の読み方等々について、こう述べている[18]。

余は文士にあらず、海軍々人なり、好んで書を読むと雖、稗史小説を手にせず、故に脚本の翻訳の如きは余が最も短とする所なり、頃日現役を退いて予備に入る、此の間具に社会人心の粧衒卑汚厭ふべく悪むべきを観る、因て嘗て伯林に於て「イプセン」の社会劇を観たることあるを想ひ、筐底を探り、「アイン・フォルクス・フアインド」（人民の敵）といふ一小冊子を得たり、「ウ井ルヘルム・ラング」の独訳なり、其の描く所極めて痛快、歎じて曰く「イプセン」余が為に之れを作れるかと、乃ち試に之れを重訳し以て其の余に在て市長たり、「トムゼン」たり、将た「ハウスタト」、「ビッリング」たるものに頒たんと欲す、抑々湯治場の人民は遂に「ストックマン」を人民の敵と宣したり、而して我が海軍の当局者並に之れに阿附する者は、余を以て海軍に弓を彎くものと呼号したり、夫れ薫蕕は器を同じうせず、正邪は倶に存せず、而て姦私の徒は世を欺き民を愚にし終に以て国家を誤る、慨するに勝ふべけんや、庶幾くば世の此の書を見る者、徒に「イプセン」を以て漫に世態を夸張写するものとなす勿れ、其の醜悪卑陋、実は焉れより甚しきものあるなり、是れ余が此の書を訳する所以なり、[ママ]

太田三次郎訳『人民の敵』は、「『ウ井ルヘルム・ラング』の独訳」からの重訳であった。「人民の敵」の主人公は、「ストックマン」である。「ストックマン」という人物は、まったくもって自分ではないか。主人公に自身をなぞらえる。かくて、「我が海軍の当局者並に之れに阿附する者」に対する憤りが、翻訳と出版の動因になった。憤りの強さは「其の描く所極めて痛快、歎じて曰く『イプセン』余が為に之れを作れるかと」によくあらわれていよう。

太田三次郎の場合、「嘗て伯林に於て『イプセン』の社会劇を観たる」体験が、翻訳の発端をなしていた。「社会劇」に焦点が合っている。太田三次郎にとって、「人民の敵」は「社会劇」の一つとして選択されたのであった。自らの主張を代弁する書として。その意味において、イプセンの「社会劇」の中でも、「人民の敵」を選択するに必然性があったといえよう。

日本におけるイプセン受容において、明治四四年頃の反応はどうであったか。イプセンが本格的に注目を集めるのは、明治三九年以降のことであるとされる。明治三九年とは、イプセンの没年である。「日本におけるイプセンを巡る最初の十年間」、即ち、イプセンの死の年、つまり明治三九（一九〇六）年から大正五（一九一六）年までの十年間の反応は、「イプセンの社会劇、問題劇への圧倒的な関心に染められて」いたという。

日本におけるイプセンを巡る最初の十年間の反応は、イプセンの社会劇、問題劇への圧倒的な関心に染められている。それは個人と家及び社会の間の緊張が強く大きかったこの時代の日本人が、その点を衝いていたイプセンの作品に一つの突破口を見出そうとしたからであろう。その上でその舞台上演は、日本人による自らの文化的伝統を踏まえた上での西洋文化への実質的参加の第一歩、という性格を獲得している。そしてそこから、イプセン現象と呼びうる社会の広範な領域に及ぶ反応を惹き起こす水源が準備されたということができよう[17]。

太田三次郎がイプセンの社会劇に着目したのも、このような時代背景を受けたものであろう。では、西尾実の場合は、どうであったであろうか。なぜ、「人民の敵」という作品に着目したのだろうか。やはり、時代の動きがあろう。明治四四年は「イプセンの社会劇、問題劇への圧倒的な関心に染められ」た時代であった。

イプセンの社会劇という時、どんな作品群を想起するだろうか。先に掲げたように、「En folkefiende」の翻訳状況を伝えた中に、

明治三四年十月

＊社会之敵（『イプセン作社会劇』）高安月郊訳　東京専門学校出版部

と、あった。「＊」印は、単行書であることを示していた。単行書『イプセン作社会劇』には、「人形之家」と「社会之敵」の二作品が収められていた。ということは、明治三四年当時、イプセンの社会劇といえば、「人形之家」と「社会之敵」の二作品が、先ずは指摘される状況にあったことを示していよう。西尾実の場合、時代は少し下って明治四四年頃のことであるけれども、事情に変わりはなかったのではないか。

一面において、二作品間の流布状況には、違いがあったであろう。「人形の家」の方が、知名度の高さにおいて、より多く流布していたのではないか[18]。

明治四十三年（一九一〇）九月、文芸協会は、演劇研究所で『人形の家』の第一回試演を行った。この時のノラ役の松井須磨子が余りにも好評だったことから、帝国劇場側から翌年の上演作品をシェークスピアの『オセロ』から『人形の家』への変更するようにとの依頼があった。こうして、『人形の家』が上演された。

上演自体は大成功を収めた。楠山正雄（一八八四～一九五〇）は、「誇張でも何でみなく、この女優のノラは、日本で初めて女優問題を解決した記念として、更には舞台の上に女性を解放した記念として永く忘るべからざるものと思う」[19]と、松井須磨子の名前も広く世の中に知れ渡ることになった。

さて、西尾実は「人民の敵」をどのように読んだのであろうか。西尾実「『人民の敵』を読みて」をみてみよう。まずは「『人民の敵』を読みて」を掲げる(9)。

「人民の敵」を読みて。

嗚呼、偉なる哉北欧の巨人！
独磐石の堅きに立てるイプセン！
爾の前に咀ふべき一九世紀は、
其虚偽と醜悪とを覆ひ尽す能ざりき。

嗚呼、煌々たる哉真理の光！
然れども万民は自らの尊むべき唯一の真情を、
情実と世論との前に踏み躙りて、
爾を闇に埋め去らんとせり。

嗚呼、偉なる哉至誠の人！
爾は独真理の楯に倚りて、
神の世界、真理の国に住めり、
然れども此世は堪えず爾を窘めたり。

嗚呼、尊き哉、讃むべき哉！
虚偽と情実との虚仮を去り、
自由に、独立に、而して強く
真理に住む人！神と在る人！

嗚呼、何をか恐れん、何をか悲しまん。
真理の為に戦ひ、神の命に斃る。

斯程の光栄、何処にかあらん、
斯程の感謝、何処にか存せむ。

一千九百十一年九月十日夜

第一連の「爾」は明示されている。イプセンその人である。「爾の前に咀ふべき一九世紀は、其虚偽と醜悪とを覆ひ尽す能ざりき。」のように、ここには「虚偽と醜悪」という視点から当代社会に対峙する「偉なる」存在者としてのイプセン理解がある。こうしたイプセン像のもとに、「人民の敵」論が第二連以下で展開されていく。

第二連の「爾」は、明示されていない。第三連の「爾」も、明示されていない。更にまた、第四連の「人」も、明示されていない。しかし、「『人民の敵』を読みて」という題名と各連の記述とを重ね合わせると、ここに言う「爾」や「人」に当たる者として、「人民の敵」の主人公、「ストックマン」の名前が浮かび上がる。西尾実がとらえた「ストックマン」の人物像が、描かれているのである。即ち、「至誠の人」「ストックマン」、「自由に、獨立に、而して強く／真理に住む人！神

と在る人」「ストックマン」のように、主人公「ストックマン」が描写の前面に押し出されている。主人公の人物像を浮き彫りにする、そこに読みを収斂させていく。社会劇の読み方として、「虚偽と醜悪」という社会矛盾の告発が読みの主眼となっていない。社会問題の抉出に力点が置かれていない。また、台詞や表現技法、構成等々作劇法にも、関心が向けられていない。劇の中心人物はどのように造形されているか、人物像を軸にした読み方に集注している。西尾実は、当時、このように劇を読んでいたのであろう。

「『人民の敵』を読みて」の「人民の敵」のテクストは、太田三次郎訳であった。太田三次郎の読みも、先に示したように、主人公「ストックマン」に焦点が合っていた。人物中心の読み方は、太田三次郎や西尾実だけではない。この作品に共通する傾きであったといえる。例えば、西尾実にとって、当時、「敬慕」[18]の人であった斎藤信策の場合を掲げよう。斎藤信策は「イプセンとは如何なる人ぞ」(『東亜の光』明治三九年六月)において、こう述べていた[19]。

『社会の敵』(一八八二)を読め、博士ストックマンはブランド(イプセン『ブランド』一八六六、の主人公名―引用者注)の所謂「我はキリスト教徒たるや否やを知らず、唯々この地の民衆の骨髄を腐食せしめたる病を観ん」が為に故郷に帰り来りし者なりき、彼の故郷には温泉あり、而かも下水溝渠の不完全なる為に、彼はこの温泉の誠に健康に害ありて所謂「腐塵に塗れたる墓場」なるを見たり。然れども市長及び市民は、この温泉が唯一の市の財源なるを以て此の如き事実の公表を喜ばず、而かもストックマンは真理の為に自由の為にかくの如き虚偽を棄てゝ公然之を公衆に発表せんとす。社会対ストックマンの戦ひは茲に起る。ストックマンも亦ブランドの如く尤も社会の多数決主義民主主義を憎む、彼は実にエマーソンの所謂真理と個性との体現なれば也、自らの安全と放逸の為に虚偽をも許認する今日の社会と相容れざる固より其所なり。「よしや世界は亡ぶとも、我豈敢て侮辱に充てる社会の圧制の下に屈せんや」とは実に彼の抱負也。

## 二 「自」という一語で語りうる発想

ここで、「法性」と「自性」の問題に立ち戻る。

本来、「自性」と「法性」という両概念は、対立する関係には置かれていない。それなのに、西尾実は両者を対立概念として用いていた[20]。それは、なぜなのであろうか。さまざまな理由が考えられる。その中で、確かなことが一つある。ここには、当時における西尾実の問題意識が密接に関わっていたのである。問題意識とは、何だったのか。二つあったと推

量された。一つは、当代思潮との係わり。今一つは、自身の生き方に係わる。いいかえると、当代思潮と自己認識、状況とその中で生きる主体、両面における問いであったといえようか。二つの内、当代思潮との係わりについては、既に記述した[148]。次は、生き方との係わりについてみていこう。

西尾実は、「法性」と「自性」の問題を解く上で、新たな視点を用意する。用意された新たな視点とは、「みずから」と「おのずから」である[149]。西尾実は、「『自』という文字」(『信濃教育』大正二年十二月号)において、「みずから」と「おのずから」の視点から、こう述べている。

彼(道元―引用者注)が法性と自性との疑問といひ「身心脱落」といふあるは、又吾人の心境を以て推想し得る所があるではあるまいか。「身心脱落」吁かくして初めて自爾の法性に覚醒しうる吾等ではあるまいか。「みづ(ママ)から」が死して初めて「おのづ(ママ)から」なる我に生き得る吾等ではあるまいか(五頁)。

「法性と自性との疑問」は、「みずから」と「おのずから」の問題としてとらえ直される。そこには、「法性」は「おのずから」なる我とし、「自性」は「みずから」なる我とする類推が働いている。「『みづ(ママ)から』が死して初めて『おのづ(ママ)から』なる我に生き得る吾等」という。ここでは、つぎの二点に留意したい。一つは、「『みづ(ママ)から』が死」す、という発想である。そこには自己否定の思考がある。今一つは、「みずから」と「おのずから」の関係性である。両者は、前者が「死して初めて」、後者が「生き得る」とあるように、否定を介しての関係にある。

「みずから」と「おのずから」という発想は、「日本思想の基層」に息づいている。「『おのずから』を理想に、それへの『融合相即』を自己否定的に求めるという――『西洋の観念形態』とは明らかに異なる」発想である。西尾実の場合も、通底している。

近代日本を代表する二人の思想家(西田幾多郎・九鬼周造―引用者注)の以上の言葉に明らかなように、ここには日本人の思想文化一般の基本発想ともいうべきものが、「自然(おのずから)」ということにおいて要約されて語られている。「自然法爾」あるいは「おのずから」を理想に、それへの「融合相即」を自己否定的に求めるという――西洋の観念形態」とは明らかに異なる――こうした基本発想の中で、日本人は独自な思想文化を営んできたのである[150]。

しかしながら、「みずから」と「おのずから」の発想源はそれだけではなかった。西尾実は、同じ論考の中で、つぎのようにも説いているからである[151]。

「自といふ字には二様の読みかたがある」。自分は曽てかう聞いた薬書を受けた事がある。そして此等の文字は

今も機に触れて心に浮かんで来る。

「自」といふ文字には二様の読方がある、「みづから」と「おのづから」と、此二語を心静に胸に繰返すときは、同一の文字であり乍ら、又一個の我の内容であり乍ら、其深さに於て其拠つて来る所に於て既に大なる径庭あるを感ぜざるを得ない。「みづから」と「おのづから」と。吁吾等はみづからなる我に生くべきであらうか、おのづからなる生活を送るべきであらうか、或人の一生は其目前の事象にのみ拘はつて夢の如く消え去り或人の生涯は其深さを天地と等しくするあるはやがて「みづから」なる我に生くると「おのづから」なる生を自覚せるとより生じ来つた差別ではあるまいか。

これをまとめると、つぎのようになろう。

「みずから」と「おのずから」は、読み方は異にするものの、「自」という「同一の文字」で表示できる概念である。この発見は、ある人からの教示による。また、「みずから」と「おのずから」は、「一個の我の内容」である。「一個の我の内容」は、「其深さに於て其拠つて来る所に於て既に大なる径庭あるを感ぜざるを得ない。」とあることから、「深さ」において差異を認めようとする。さらに、「みずから」と「おのずから」は、「吁吾等はみづからなる我に生くべきであらうか、おのづからなる生活を送るべきであらうか」により、人の生き方に関わる事柄であることがわかる。両者の内容はというと、こうである。「みずから」は「或人の一生は其目前の事象にのみ拘はつて夢の如く消え去」る「自我」として説かれている。これに対して、「おのずから」は「或人の生涯は其深さを天地と等しくするある」とする。「みずから」と「おのずから」の別は、「自覚」の有無から将来する「差別」だとする。「みずから」と「おのずから」、両者の関係性については言及がない。

ここで注目したいのは、「みずから」と「おのずから」について「一個の我の内容」ととらえる考え方である。それは葉書の差出人の意図とは異なっていた。差出人のねらいは、そこにはなかった。『自』という文字」から四年後、西尾実は「回顧と反省」（『学友』大正六年十二月号）において、こう述べている。

（明治四三年四月に長野県師範学校卒業後一学期を出ない頃のある日―引用者注）私は次のやうな葉書を手にした。

「『自』といふ字が二通り読み方のあるといふ事を面白い事に思ふ。神と自己との関係が此処にも現れて居ると思ふ。」

私はこれだけの文句の中に、どれだけ長い長い意味を読み味つたことであつたらうか（三九～四十頁）。

葉書の差出人は「神と自己との関係が此処にも現れて居る」

のように、「『自』といふ字が二通り読み方のあるといふ事」態を、「神と自己との関係」の相のもとに受けとめようとしている。だが、葉書の受取人である西尾実のとらえ方はそうではなかった。「一個の我の内容」という理解を示していた。差出人の意図とは明らかに異なる対応である。明らかにとは、意識的にともいいかえることができる。

葉書の差出人は、誰だったのか。

西尾実は信州時代の論考を軸にして一冊の本にまとめている。書名は『信州教育と共に』（信濃教育会出版部 昭和三九年八月二五日）である。本書に、「『自』という文字」（『信濃教育』大正二年十二月号）も収載している。収載の際、西尾実は各論考ごとに執筆の意図や経緯、及び背景等々、いわゆる自己解題ともいうべき文章を付している。「『自』という文字」の場合は、次のようであった。

この葉書をくれたのは森下二郎である。東京へ出て学生生活にはいった第二年目に書いたものらしい。森下君は飯田小学校における同僚として知りあい、生涯もっとも深い影響を与えられた友人である（一頁）。

「葉書」の差出人は、森下二郎であったという。真偽については、今は吟味する用意がない。ここでは西尾実の指摘を仮に受け入れて、先に進みたい。

西尾実は、明治四三年三月に長野県師範学校を卒業し、同年四月より長野県下伊那郡飯田尋常高等小学校に訓導として赴任した。森下二郎は、前年の明治四二年三月に東京高等師範学校国漢科を卒業し、同年四月より同校に就任していた。二人の出会いは、明治四三年四月のことであった。二人は、直ぐに親しくなり、親交を深めていった。森下二郎には、当時の『日記』が残されている。西尾と森下は『日記』を読み合い、意見を交流し合う間柄にあった。

わたしが森下君をたずねた場合、必ず見せてもらうのは、森下君が日記のようにノートに書いている随想とか試論とかいうべきものであった。森下君の随想・試論は、備忘的な記録でもなければ、刊行物に発表するような原稿でもない。あくまで個性的な真実の披瀝であり、体験と思索の表現であって、独自性に貫かれた著作であった。わたしは当時、新聞や雑誌に掲載されている評論や随筆などよりも、もっと深い感動をもって、それを読むことが楽しみであった[19]。

森下二郎は、明治四三年七月十五日の『日記』に「うづまき」という見出しのもと、こう記している[20]。

聡明の人は唯一種の対話を行ふ二個の「我」の間の対話である。一時しか続かない現在の我と、常に人が努力して到達しやうとする真の「我」との対話だ。

——モリバレス。

「みずから」と「おのずから」は、西尾実の場合、「一個の我の内容」であった。「モリバレス」の言葉と比べてみよう。両者は、ともに、「我」を問う。ともに、また、「我」を二分割する。分割された内容は近似している。即ち、「或人の一生は其目前の事象にのみ拘はつて夢の如く消え去」り（「みずから」）と「一時しか続かない現在の我」、そして、「或人の生涯は其深さを天地と等しくするある」（「おのずから」）と「常に人が努力して到達しやうとする真の『我』」のように、「一個の我の内容」は、両者において、各々が対応する関係にある。類似性は高いといえよう。

西尾実は、森下『日記』のこの箇所を読んだことであろう。というのも、二人の親交は、『日記』を読み合う関係にまで至っていたからである。森下二郎からの葉書に接した時、この箇所が脳裏に浮かんだのではないか。

ところで、『日記』に引用された「モリバレス」の出所は、何だったのか。調べ得た範囲では、上田敏の小説「うづまき」の可能性が高い。理由は、『日記』の該当箇所に「うづまき」という見出しがあったことに加えて、「モリバレス」の言葉が一致していることである。

上田敏の小説「うづまき」は、明治四三年一月一日より三月二日の間、『国民新聞』に連載され、同年六月二七日には、単行出版（大倉書店）されている[19]。

上田敏「うづまき」の中に、「モリバレス」に係わる記述がある。次に、該当箇所を掲げる[20]。

春雄は此友人の談話を聞いて、モリス・バレスの言に、

「聡明の人は唯一種の対話を行ふ。二個の『我』の間の対話である、一時しか続かない、現在の『我』と、常に人が努力して到達しようとする真の『我』との対話だ」

とあるのを思出した。永田は今其真の「我」を発見しつゝあるのだろう。いや、他事では無い、自分も亦此真の我を求めることを怠つてはなるまい。春男が青春の閾に立つて堅く決心した事は、生命の内容を豊富にしようといふのであつた。

モーリス・バレスの言は、「二個の『我』の間の対話」のように、「対話」ということの重要性が説かれている。一方、上田敏「うづまき」では、「永田は今其真の「我」を発見しつゝあるのだろう。いや、他事では無い、自分も亦此真の我を求めることを怠つてはなるまい。」のように、真の「我」の発見に主眼が置かれている。他方、西尾実の場合、「二個の『我』」というとらえ方と各々の内実に関心が向いている。いいかえると、西尾実の場合、「我」という対象を把握する仕方、考え方に関心が集注している。イプセン「第三帝国」論の受容態度と同じである。

「自」という一語で語りうる発想源は、いまみてきたよう

に、森下二郎の『日記』を介しての「モリバレス」の言葉であった可能性が考えられる。だが、それだけではなかった。西尾実は「『自』という文字」において、「みずから」と「おのずから」の視点について、次のようにも述べているからである。

「みづから」なる小我を去りて「おのづから」なる我に醒めるのは吾人に取つて大なる感謝であり恩寵である（四頁）。

「小我」と「恩寵」という言葉に留意したい。「自」、という一語で語りうる発想に迫る鍵語になると考えるからである。まずは、各々の言葉の概念内容を確かめておこう[22]。

小我　仏教で、真実、自在、不変常住をもつ涅槃の大我に対し、真実もなく、自在もない凡夫としての自己。また、哲学で、宇宙の唯一で絶対の実体に対し、人間のもつ小さな自我。

恩寵　①神仏や君主がめぐみある愛を与えること。いつくしみ。恩遇。寵愛。②特に、キリスト教で神が人類にあたえる愛。神のめぐみ。

「小我」は「大我」と対概念の関係にある。西尾実のいう「みずから」と「おのずから」は、各々、「小我」と「大我」に対応する内容ともみることができる。「小我」「大我」という語は、仏教や哲学の用語であった。けれども、西尾実の用法が、仏教や哲学を踏まえたものであるとまではいえない。理由は、キリスト教の色合いの濃い「恩寵」という言葉が同じ文脈において用いられていること、一つからも推量できよう。

西尾実は、さらにまた、同論考「『自』という文字」の中で、次のようにも述べている。

「みづから」なる我は此肉身と共に滅ぶべき自我であり、「おのづから」なる我は黙々の裡に天地人生に行はるゝ聖なる法則である。人生は実に此間に行はるゝ健闘に外ならぬ（四頁）。

「みずから」と「おのずから」、両者間には「健闘」という関係性があるとする。しかしながら、それ以上には述べていない。「健闘」の結果は、どうなるのだろうか。「みずから」と「おのずから」の間には断絶があるのか。それとも、両者は連続しているのか。先に掲げた「一個の我の内容」でも、同じ構図が認められた。「一個の我の内容」は「其深さに於て其拠つて来る所に於て既に大なる径庭あるを感ぜざるを得ない。」とあった。だが、それ以上の言及はなかった。「既に大なる径庭あるを感ぜざるを得ない。」の「大なる径庭」とは、断絶を意味しているのか。それとも、連続を示しているのか。断絶と連続とでは、様相は大きく変わる。

「みずから」と「おのずから」の関係は、断絶している。そ

う考える場合、思想上の血脈として何が想定できるだろうか。キリスト教、儒教が思い浮かぶ。

キリスト教においては絶対の神と有限で罪に汚れた人間の間に連続する通路は切断されている。孔孟の教えは道徳国家をめざす君子道徳であって、政治のための道徳である。それらにおいて絶対者または天命はあらゆる行為の参照軸であり、それが「いと高きもの」で天上的なものである。両者において絶対者は近づくことのできない消尽点または統制理念である[23]。

反対に、「みずから」と「おのずから」、両者は連続していると考える場合は、どうなろうか。連続観に立つ時、そこには「儒教を中核とする近世的伝統」があったとみることができようか。

自我の拡充が必ずしも一つの調和的な統一を実現するという保障はない。また、主観的なものから客観的なものを導くという立場は必ずしも必然的ではない。こうした論理の展開において、暗黙のうちに前提されている予定調和は、彼らの精神の根底に存する伝統的世界に由来している。彼らの内奥に既に、人間と自然、主観と客観とが連続する世界があったのであり、彼らの論理は、いわば、それによって支えられていたのである。その意味で、明治の思想を根底から規定していたのは、儒教を中核とする近世的伝統であったといえよう[24]。

「みずから」と「おのずから」、両者間の関係性については、このように、断絶と連続、両様の場合が考えられる。けれども、いずれとも決めるまでにはない。確かなことは、いま見てきたように、ここには仏教、儒教、キリスト教等々に係わる用語が混在していることである。このことは、何を物語っているのだろうか。一つに時代背景があろう。

時代は、「修養」の季節を迎えていた。明治三八・九年頃から大正時代にかけて、「修養」というようなことを教育目的とした諸々の思想教化運動がみられた。社会主義思想とその運動に呼応するかのように、日露戦争後、家族主義的国家観を普及するために、政府によって、上からの国民道徳運動が強力に推進された。一方、明治末年より大正時代にかけて、民間からの思想運動として、自然主義、人道主義、人格主義、新カント派等の思想活動が活発になっていった。これらの流れの中にあって、その思想の根拠を東洋的道徳思想、修養思想に持つところの一連の思想教化運動があった。時代は、修養思想が諸々の教化運動として生まれてくるような風潮のさなかにあった[25]。当代の代表書の一つに、新渡戸稲造『修養』（実業之日本社　明治四四年九月）がある。本書は、発行されるや、たちまちにして版を重ね、明治四四年の九月中すでに第六版、大正三年二月には縮刷版として第二九版を出してい

る[26]。爆発的な売れ方であった。「小我」「大我」について、本書はこう説いている。

孔子は「七十にして心の欲する所に従へども矩を踰えず」といふて居る。心の欲する所を行ふても程度を越えぬ。是は克己の最上であらうと思ふ。恐らく動機正しく、外部の道と己の心とが吻合し、勉めないで其為す所が道に中るのである。一般公衆の善とする所と、己の利とが別なものでない。故に己の欲する所をドシドシ行ふても、それが直に一般公衆の利となる。即ち小我が無くなり、世界を以て大我とする故、すること為すことが矩を踰えぬのである。此境遇に達するには小我を捨てねばならぬ。普通にいふ己、即ち他の公の利益に相反した一個人の利益を捨てることになる。是は己に克つて克つて、克ちぬき、而して己を殺すに由つて達せらるるのである。勿論この場合に殺される自己は仮己である。仮己を殺して益々発揮する己は真己である。身我が殺されて心我が愈々活きる所以である。／この犠牲的の思想がなければ、世界の進歩は望まれぬ。(略)道徳の歴史の中で最も人の目に立つものは、ゴルゴダの山上で耶蘇が磔刑に処せられたことであらう。是は犠牲の最も大なるものである。己の生命を捨てゝ始めて大なる命を得、小我を捨てゝ始めて大我を得るのである。克己して己に克ち終へた時、始めて真の己に達するのである[27]。

「小我」「大我」という言葉は、先に示したように、哲学や仏教の用語であった。だが、ここでは孔子の教えやキリスト教の文脈の中で用いられている。しかも、「小我を捨てゝ始めて大我を得る」「克己して己に克ち終へた時、始めて真の己に達する」とある。ここにいう「小我」「大我」は、連続する関係にある。断絶ではない。孔子の教えやキリスト教に係わる用語が引かれているといっても、連続という点において、思想上の血脈は儒教やキリスト教の系譜に接続しない。用語の出自と内容とは、必ずしも対応する関係にはないからである。混在しているといった方が適切であろうか。その意味において、西尾実の場合と通じるところがある。

「修養」とは、当時の主張において、どのように説かれていたのだろうか。一口に「修養」というが、その主張には、禅、儒教、キリスト教など様々な言説に根をもっていた[28]。まさに様々な言説に根をもつ「修養」論の中に、西尾実は青年期を迎え、自らの知の形成を図っていた。「道元禅師」(『信濃教育』大正三年三・四月号)執筆当時、そこには、対象把握の方法に関心を集注する西尾実がいた。「自」という一語で語りうる発想も、その一つであった。それも、いまみてきたように、一色には染められていなかった。混在していた。混在は、一面において理解力が不十分であったともいえるし、また、

他面では意図的な操作のあらわれともいえる。さらなる精査が求められる。

（この項、続く）

〈注〉

(1) 杉　哲「飯田時代の西尾実（五）」『国語科教育研究論叢』第二号　一九九八年八月三一日

(2) 杉　哲「西尾実と道元（Ⅲ）」『熊本大学教育学部紀要』第五五号　人文科学　平成十八年十一月三十日

(3) 杉　哲「西尾実と道元（Ⅸ）」『熊本大学教育学部紀要』第六十号　人文科学　平成二三年十二月十二日

(4) 中村都史子『日本のイプセン現象　一九〇六～一九一六』九州大学出版会　一九九七年六月五日　五八～五九頁

(5) 榊原貴教「イプセン翻訳作品目録」『翻訳と歴史』第三五号　ナダ出版センター　二〇〇七年十一月三十日　二十～二一頁

(6) 太田三次郎訳『人民の敵』政教社　明治四四年八月十八日

(7) 注(4)　四三三～四三四頁

(8) 岡本健志「明治期におけるイプセン受容」（在日ノルウェー王国大使館公式サイト）、但し原注(13)は省いた。

(9) 西尾実「『人民の敵』を読みて」『細道』明治四四年十一月印刷発行　発行兼印刷人・森下二郎　印刷所・星野活版所

(10) 西尾実「回顧と反省」『学友』大正六年十二月　四十頁

(11) 斎藤信策「イプセンとは如何なる人ぞ」『東亜の光』明治三九年六月（引用本文は斎藤信策『芸術と人生』昭文堂　明治四十年六月二四日　三六八～三六九頁によった。）

(12) 杉　哲「西尾実と道元（Ⅷ）」『熊本大学教育学部紀要』第五九号　人文科学　平成二二年十二月三日

(13) 注(3)に同じ。

(14) 「みずから」「おのずから」という視点からの先行研究には、調べ得た範囲では、次の二点がある。

・桑原隆「国語教育論の展開―西尾実の国語教育論―」『東京教育大学教育学部紀要』第二十巻　昭和四九年三月

・桑原隆「西尾実の『国語国文の教育』（昭和四年）までにみられる国語教育観」『国語科教育』第二一集　昭和四九年三月二八日

(15) 竹内整一『「おのずから」と「みずから」―日本思想の基層』春秋社　二〇〇四年二月一日　八～九頁

(16) 西尾実「『自』という文字」『信濃教育』大正二年十二月号　三頁

(17) 西尾実「森下二郎君とその生涯」『信濃教育』昭和三八年六月号　六十頁

(18) 『森下日記二（片鱗　巻二）』九頁（引用本文は下伊那教育会館蔵「森下文庫」『清書本』によった。）

(19) 「『うづまき』編注」（上田敏全集刊行会責任編集『定本上田敏

全集 第二巻』教育出版センター 昭和五四年二月二五日 六五一頁）

上田敏「うずまき」の同時代評価について、本巻の島田謹二「解説」は、こう述べている。

一九一〇年はじめ、この小説がでた時の日本の読書界を回顧してみると、丁度自然主義の全盛期にあたっていたから、その大勢力に異を立てたこの作品が評判のよかろうはずはない（六二四頁）。

(20) 上田敏「うづまき」（引用本文は上田敏全集刊行会責任編集『定本上田敏全集 第二巻』教育出版センター 昭和五四年二月二五日 五九五～五九六頁によった。）

(21) 注(19)によると、「モリス・バレスの言に」（初版本）は、『国民新聞』（初出）では「もりす、ばれすの言に」となっている。森下二郎の『日記』に引用された「モリバレス」という表記は、注(18)に掲げたように、「森下文庫」（下伊那教育会館蔵）『清書本』に従った。原本は未見。原本との勘合は、今後の課題である。

(22) 『日本国語大辞典（縮刷版）第二巻』小学館 昭和五四年十二月二十日 縮刷版第一版第一刷

(23) 今村仁司『親鸞と学的精神』岩波書店 二〇〇九年十一月二七日 二三七頁

(24) 渡辺和靖『明治思想史』ぺりかん社 昭和六十年十一月十五日 増補版第一刷 三三八～三三九頁

(25) 武田清子「キリスト教受容の方法とその課題―新渡戸稲造の思想をめぐって―」（武田清子編著『思想史の方法と対象』創文社 昭和三六年十一月二十日 二九七～三百頁）

(26) 「解題」『新渡戸稲造全集 第七巻』教文館 昭和五九年五月十五日再版 六九一頁

(27) 新渡戸稲造『修養』（実業之日本社 明治四四年九月／引用本文は『新渡戸稲造全集 第七巻』教文館 昭和五九年五月十五日再版 一三九～一四〇頁によった。）

(28) 『漱石文学全注釈 十二』（注釈者 藤井淑禎 若草書房 二〇〇〇年四月十五日 五二～五三頁）

〈付記〉

・引用文献の漢字表記は、新字体に改めた。

・引用文献の発行年は、文献の奥付に従った。

（すぎ・さとる 熊本大学教育学部教授）